2025.5.22

PDF、2025年
リネンにアクリル
120 x 100 cm

次回展のご案内

チェン・フェイ展｜父と子

会期：2025年7月3日[木]→10月5日[日]

休館日：月曜日（7/21、8/11、9/15は開館）　開館時間：11時より19時まで
入館料：大人 1,500円 / 大人ペア 2,600円　/学生（25歳以下）・高校生・70歳以上の方・身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳お持ちの方、および介助者（1名様まで）1,300円 / 小・中学生 500円

主催/会場：ワタリウム美術館
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6　Tel：03-3402-3001　Fax：03-3405-7714 Email：official@watarium.co.jp
http://www.watarium.co.jp

協力：PERROTIN

WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art

「父と子」ドキュメントより

昔から絵を言葉で説明するのがすごく苦手で。
いつも思うんですが、絵ってそれ自体がひとつの言語みたいなもので、
画材とか筆のタッチ、色、構図、状況、そしてコンセプトを通して、
平面上に可視化されたドラマを生み出すものであり、
その入り口は人それぞれ異なるものです。
自分の作品を作る動機も、わりとその時々の自分の状態に左右され、
漠然とするときもあれば、深く考え、慎重に構成されたときもあります。
そのため、自分の作品を説明するのは決して簡単なことではありません。
全体として、本展に出品する作品は自然に出てきたものに近い感じです。
きっかけはコロナの時期で、そこから今に至るまで描いてきました。
私たちが生きている世界は、どこかしら不寛容と感じて、
その思いが私の作品における「逆戻り」を起こしたのかもしれません。
全体が混乱している中で、個人の力はあまりにも小さく見えます。
現実主義の画家として、時代への関心を絵画に取り込もうとする自分にとって、
それは大きな混乱と無力感をもたらしました。
そうした中で、現実に関わるモチーフを扱うことすら、空々しく感じられたのです。
幸いなことに、その間に私は父親になりました。
生活の重心が変わり、
多くの時間とエネルギーが自然と子どもの成長に目が向くようになりました。
その経験が、私を「家」というものに対する不安や執着から解放し、
命のこと、生活そのものへの信頼を取り戻せた感じがしました。

そんな中で思い出したのが、私がかつて読んだドイツの漫画家
E.O.プラウエンの作品、『Vater und Sohn（父と子）』です。
私にとって、父と子の日常の出来事をユーモラスに描いたもので、
セリフが一切なく、時代背景も排除され、
血のつながりの中にある素朴で真実味のある感情がしっかり伝わってくる作品でした。
プラウエンの時代と私の時代は大きく異なりますが、彼の作品にはどこか自分が重なるように感じます。
現代社会に対する漠然とした不安感は常に私の心を覆い、今日の私たちの選択がどのような未来を導くのか、
そしてその未来において私たちはどこへ向かうのか。
大きな時代の流れの中で、答えを知ることができず、ただ流されるばかりです。
かつて、絵画は私にとって一つの避難所でした。
私はアートが無限だと思い、自由な想像の中で、自分なりの宇宙をつくりました。
巨大で精緻で、無秩序な自由の力が交錯して生まれるものでしたが、
その自由さも現実のルールに押し込まれて、
そして私たちが生きている世界にますます近づきつつあります。
想像が時空を構築する力は疲弊し、本来の活力を失い、
現実はますます不条理になり、トンネルとなって私たちを飲み込みます。
このシリーズの作品は、ある意味で「自分を救う」ようなものです。
大きくて不確かな外の世界から、生命そのものへと引き戻し、
より狭く、生活の源に近い場所へ戻る感じです。
そこで私は、再び表現力を取り戻せました。
この制作の段階に「相応しい」タイトルをつけようと思いましたが、
結局は、ただ理由もなく自分の娘を描きたいという
シンプルな理由に行きつきました。
彼女への感情を描写したかった、彼女との会話を記録したかったというだけでした。

彼女への想いを描きたくて、
彼女との会話を残しておきたくて。たぶん、彼女のすべてが、
今の自分にとっての「新しいリアル」なんだと思います。

チェン・フェイ

展覧会について

チェン・フェイ（陳飛 CHEN Fei）は、1983年中国山西省生まれ。現在、北京を拠点に活動しています。
本展では、2022年から2025年にかけチェン・フェイが描いた新作絵画15点に加え、高さ7mの壁画、インスタレーション、ドキュメントなどが、ユニークでサイトスペシフィックにキュレートされた空間の中で展示されます。
本展の出発点は、ナチス時代に深く影響を受けたドイツの著名な漫画家、E.O.プラウエン（1903-1944）が制作した名作『Vater und Sohn（父と子）』を参照しています。
この漫画は、父と息子の関係を描いているだけでなく、家族、仲間、愛という貴重で示唆に富む意味を、非常に特異な社会的設定の中でで探求しています。
E.O.プラウエンの物語と共鳴するように、チェン・フェイは本展で自伝的なアプローチを用い、親しい知人との関係を描き、中国人画家としてのアイデンティティについての物語を織り交ぜています。作品は、夫と妻、父と子の家族関係や、同僚や友人の社会的な力関係を掘り下げ、画家自身の芸術家としての職業的イメージについての思索も含んでいます。

漫画家の出張、2024年
リネンにアクリル
290 x 220 cm

10年来の友達であるチェン・フェイ。僕たちは国も世代も作品のタイプも違うけど、
絵を通して世界に接続したいと思ってる、同じ種類のペインターだ。
お互い言葉でコミュニケーション出来ないが、会うとなんか嬉しい。
父となった彼が世界をどう見てるのか？
新作の個展を東京で見れるのはホントに楽しみです！

—— 加藤泉（アーティスト）

ラブレター、2024年
リネンにアクリル
290 x 220 cm

展示作品について

まずは《ラブレター》という作品からお話しさせてください。
私の娘は早産で生まれ、体重は1斤（500グラム）にも満たないほどでした。
案の定、幼少期から体が弱く、成長過程も非常に大変で、毎日子どもの排便を確認することが、
父親としての私の日課となっていました。漢方でも西洋医学でも、赤ちゃんの便の状態は非常に重要な基準であり、
毎日欠かさず写真に収めていました。時が経ち、娘も成長し、健康な身体を持つようになった今では、
そんな記憶もすっかり忘れていたのですが、ある日、携帯電話の中の画像を探していたときにふと気づいたのです。
数年前の私のスマートフォンには、他の写真がほとんどなく、サムネイルには様々な便の写真ばかりが並んでいました。
それらを見たとき、私はただただ感慨深くなりました。
それらは、まるで文字のように見え、まだ言葉を話せなかった頃の娘が、
「パパ、今日は調子が良かったからきれいな形だったよ！」とか「パパ、今日は体調が悪かったから暗い色なんだ」
と語りかけてくるように感じたのです。決して嫌悪感はなく、大量の写真はまるで一篇の長詩のように思えました。
もちろん、これは私自身の父親としてのフィルターを通して見た感情であり、他の人の心を打つかどうかはわかりません。
でも私はどうしてもこれを作品として表現したかったのです。とはいえ私はアーティストであり、
便そのものを写実的に描くわけにはいきません。そこで思い出したのが新古典主義であり、ウィリアム・モリスの装飾的な
手法でした。私はそれを壁紙のように装飾的に再配置し、平面化に処理し、もっとも適切な形にできたと感じています。
さらに、画面を貫く光が、形式美に満ちた絵に空気を吹き込み、生命を与えてくれました。

この作品は極めて私的なものですが、時に私は考えるのです
— 画家になったということ自体が、
自分自身を喜ばせるためだったのではないかと。

チェン・フェイ

超自然、2022年 リネンにアクリル、金箔 120 x 100 cm

《超自然》は、私が自分の子供を初めて描いた作品です。完成されたペイティングとして仕上げることを使命として取り組みました。
内容や構成、象徴などの職業的な思考は、描く前からすでに頭の中で考えていましたが、実際に筆を取ってからは、最も単純な問題に悩まされました。
初めて父親になった時のように、緊張しすぎて上手く描けないのではないかと心配になったのです。
似ていないのでは、きれいに描けないのでは、など、本来なら気にするべきでないことが気になり、不安になりました。
そのとき、私は絵との関係が変わったことに気づきました。もともと絵が上手く描けなくても問題なく、今までの経験上で、うまくいかなければ捨てるか、時間を置いて手直しすればいいとやってきました。
ですがこの作品は違いました。まるで絵に導かれているような感覚があり、もしかしたら、それは子どもという存在があまりに大切だったからかもしれません。
私は、子どもの誕生が自分の制作に影響を与えるかどうかを否定しようとしました。
感情に左右されず、冷静かつ客観的に仕事に向き合おうと努めてきましたが、やはりその影響は少しずつ、しかし確実に染み込んできたのです。

最終的に私は、その感情の変化を受け入れることにしました。
そしてこの変化を、実際に絵の中に落とし込みました。制作中に、いくつかの調整を加え、イメージを追加し、過剰に執着していた部分のバランスを取り、
より絵に想像の空間をもたらすことができたのです。

チェン・フェイ

チェン・フェイ（陳飛 CHEN Fei）について

1983年山西省生まれ。北京電影学院卒業後、北京を拠点に活動している。政治的なグランドナラティブが崩壊した後の時代を背景として、日常生活に散在する時間の断片を発見し、捉え、再構成することに長けた画家である。一方では、中国の近代化の歴史的過程における現実主義絵画の積極性を弁証的に継承し、「経験主義的」な時間の中で人間のありようを描くことに転じている。物語的な肖像画であれ、特定な文脈の中における静物画であれ、彼の作品に現れる日常生活の片鱗は、過去の歴史的幻想と具体的現実の重なり合う影とともにちらつく。その一方で、彼はまた時間性をもつ編集方法により、生活様式と物語の情景を描写し、再編成を繰り返している。彼自身のイメージが数多くの肖像画の中で刻々と変化しているように、一見パラレルな時空に存在する個々の物語は、異なる尺度で運命の重みを再分配している。出来事と出来事の間のオルタナティブなつながりを通じて、私たち全員に共有される現在の時間を発見することができる。

上海余德耀美術館、日本の下山芸術の森発電所美術館、北京今日美術館、ニューヨーク、パリ、香港のペロタン、北京のギャラリー・ウルス・マイレ、ルクセンブルクなどで個展を開催。2012年にマルティーニ「未来の芸術英才に注目賞」、2007年に中国新鋭絵画賞を受賞。

チェン・フェイ（陳飛 CHEN Fei）　略歴

1983　中国山西省洪洞県生まれ
　　北京を拠点に活動している
2005　北京電影学院美術科卒業

個展
2025　「グランドロビー」ル・コンソーシアム現代美術センター（フランス、ディジョン）
2021　「朝市」余徳耀美術館 中国上海
2019　「団欒」ペロタン（アメリカ、ニューヨーク）
2017　「美術」ペロタン（フランス、パリ）
2016　「これから先はまだ長い」ギャラリー・ウルス・マイレ（スイス）
　　「これから先はまだ長い」ギャラリー・ウルス・マイレ（中国、北京）
　　「この世界に生きている－加藤泉x 陳飛」
　　下山芸術の森発電所美術館（日本、富山）
2014　「私と肉」ペロタン（中国、香港）
2012　「拡張する想像力」オリヴィア・ファイン・アート（イギリス、ロンドン）
2011　「ストレンジャー」今日美術館（中国、北京）
2010　「悪いテイスト」少励画廊（中国、香港）
2009　「一筋」星スペース（中国、北京）
2004　「陳飛個人油絵展」北京電影学院（中国、北京）

グループ展
2024　「目 中国：新世代のアーティストたち」ポンピドゥー・センター（フランス、パリ）
　　「ズボンをはいた雲：今日の絵画」池社（中国、上海）
　　「ポスト80年代の写真 世代間の飛躍」油罐芸術中心（中国、上海）
2023　「愛のグリッチ：新しい公式」東京藝術大学美術館陳列館（日本、東京）
　　「Looking at the stars」金鷹美術館（中国、南京）
2022　「絵画の物語 ― 個人の物語での中国絵画史」壹美美術館（中国、北京）
　　「この世にいること」龍美術館十周年特別展 龍美術館（中国、上海）
　　「共同の現場」UCCA15周年理事コレクション展 北京尤倫斯当代芸術中心（中国、北京）
　　「ON OFF 2021: 未来へ戻る」和美術館（中国、広東）
2021　「A Higher Calling」空白空間（中国、北京）
2020　「自・長物誌」金鶏湖美術館（中国、蘇州）
　　「サイレントロングヴァージョン」西岸美術館（中国、上海）
2018　「祝福」Gallery Vacancy（中国、上海）
2016　「我々の絵画」央美術館（中国、北京）
　　「狭い扉としての絵画：80年以降生まれアーティスト展」蜂巣当代芸術センター（中国、北京）
　　「新資本論」黄予コレクション展（2007−2016）成都当代美術館（中国、成都）
2015　「民間のパワー」北京民生現代美術館開館展 北京民生現代美術館（中国、北京）
　　「ジェネレーション転換の中国創造」アロス・オーフス美術館（デンマーク）
2014　「ワームホール ― 地縁の引力」大未来林舎画廊（台湾、台北）
　　「1199人」龍美術館コレクション展 龍美術館（中国、上海）
　　「中国新鋭絵画賞 ― 十周年招待展」Hi 芸術（中国、北京）
　　「第三回武漢美術アーカイブ展」湖北美術館（中国、武漢）
2013　「Criss-Cross: 中国当代青年アーティスト作品コレクション展」龍美術館（中国、上海）
　　「アジア不安の旅」缶子茶書屋（台湾、台北）
　　「第一回“中国の寵児”未来のマスターを発見する展覧会」文軒美術館（中国、成都）
　　「ごちゃごちゃー若手アーティストの視覚修辞アート展」金鶏湖美術館（中国、蘇州）
2012　第一回新疆コンテンポラリーアートビエンナーレ 新疆国際会展中心（中国、新疆ウイグル）
　　「緯度―態度」香港少励画廊20周年展 少励画廊（中国、香港）

「第一回CAFAM 未来展：サブ現象・中国青年アート生態報告」 中央美術学院美術館（中国、北京）
「青年アーティスト実験季」第二回展覧会 A4当代芸術センター（中国、成都）
「未来の英才を注目」計画入選展 今日美術館（中国、北京）
「解禁された後 ― 新しいジェネレーションの性と愛」 798時態スペース（中国、北京）
「New and Past」 谷公館（台湾、台北）
2011 「一人の劇場 ― 80年以降生まれアーティスト作品展」 何香凝美術館（中国、深圳）
「All Cannibals?」 ミー・コレクターズ・ルーム・ベルリン（ドイツ、ベルリン）
「Sketching the Heart」 Beijing Space（中国、北京）
2009 「2009 新作」 星スペース（中国、北京）
「生化 ― 虚実の間―アニメーション美学ビエンナーレ」 今日美術館（中国、北京）
「Niubi Newbie Kids II」 少励画廊（中国、香港）
「私の夢」 今日美術館（中国、北京）
「ゼロからヒーローへ」 星スペース（中国、北京）
2008 「Niubi Newbie Kids」 少励画廊（中国、香港）
「自分を探す」 民生現代美術館（中国、上海）
「源 ― 第一回ムーンリバー彫刻アートフェスティバル」 ムーンリバー美術館（中国、北京）
「建て直す ― 四川地震災害地域の希望小学校へ作品贈呈展」 星スペース（中国、北京）
「浅薄は私の座右銘ではない ― 80 年以降生まれのアート」 星スペース（中国、北京）
2007 「聚沙為仏塔 ― 中国新鋭絵画賞」 炎黄芸術館（中国、北京）
2005 「次の駅、カートゥーンか？」 何香凝美術館（中国、深圳）
「未来考古学―第二回中国芸術トリエンナーレ」 南京博物館（中国、南京）
「景観：世紀と天国―第二回成都ビエンナーレ」 成都世紀城（中国、成都）
「セルフ・メイド ジェネレーション：中国コンテンポラリー絵画展」 上海証大現代芸術館（中国、上海）

受賞歴
2012 マルティーニ「未来の芸術英才に注目賞」
2007 中国新鋭絵画賞（中国、北京）

出版 「一筋」 星スペース
「悪いテイスト」 少励画廊
「世界映画悪役誌」 中国青年出版社
「見知らぬ人」 今日美術館出版社
「拡張する想像力（Extravagant Imagination）」 オリヴィア・ファイン・アート
「Chen Fei」 Distanz
「これから先はまだ長い」 ギャラリー・ウルス・マイレ
「Izumi Kato x Chen Fei - Living in Figures」 ペロタン
「団欒」 ペロタン
「朝市」 余徳耀美術館

コレクション
今日美術館（中国、北京）
龍美術館（中国、上海）
震旦博物館（中国、上海）
ロサンゼルス郡立美術館（アメリカ、ロサンゼルス）
ミー・コレクターズ・ルーム・ベルリン（ドイツ、ベルリン）
Franks-Sussコレクション（イギリス、ロンドン）
DSLコレクション（フランス、パリ）
香港M+美術館（中国、香港）
新世紀当代芸術基金会（中国、北京）